

里山学院 後援会 VOL.7(2012.7)

鈴鹿里山学院 開設！

是非、一度お越しください！

～心に響いた竣工式～

待望の鈴鹿里山学院が完成しました。その竣工式に後援会の代表としてお招きをいただいたので、喜んで参加させていただきました。現時点で、県一の最新式の設備を備えた館と施設は、出席された社会福祉法人の仲間の方々から「うらやましい！を通り越して、憎い！」とまで言わしめた立派なものです。これはとても紙面では紹介しきれないので、ぜひ、箕田を通りかかったら立ち寄ってください。

この施設の必要性については、丁度、鈴鹿市長の末松則子さんが私の前の席で感動のあまり目頭をハンカチでおさえて涙を拭ってみえたエピソードでお伝えします。それは、この施設の建設に関わった業者の方に花束を贈呈するシーンがありました。自らの役割も理解しがたい2～3歳の幼児の無垢な瞳とあどけないかわいい仕草に、市長は思わず涙したようでした。この施設がこの子達の為になくてはならないものとして、説明不要の場面であったと思いました。市長は、さらに祝辞の中で「鈴鹿の子達を、よそでお世話になっていたのが恥ずかしい。鈴鹿の地にこの施設が出来たことを大変嬉しく思う。鈴鹿の子は鈴鹿のふるさとで育てたい。」とのことでした。想いがこもり、期待していますよね。本当に鈴鹿里山学院万歳です。またこの建物は、近鉄電車からも一瞬ですが見えるようです。田園ですが、集落に近く、消防署、公民館も隣接しています。淋しくはありません。

それから、里山学院の建物は河芸と鈴鹿の二つになりましたが、後援会は一つです。里山学院後援会として、新施設に今後も対処することがあれば皆さまとご相談の上で、前向きに考え、協力していきたいと思えます。

後援会 会長 森下 真治



鈴鹿里山学院 施設外観 南東より

「上は一寸、中三寸、下下の下品は大股開き」

さて、何のたとえでしょうか？読み方は「じょうはいっすん、ちゅうさんずん、げのげひんはおおまたひらき」と読みます。

これは小さい頃に教えられた履物の脱ぎ方です。上品な人は左右の履物の間隔が一寸つまり3センチ、中品の方は三寸、下品な人は大股を開くくらい一足の履物の左右が離れていることです。

履物の脱ぎ方を見れば、その人の人となりがわかるということです。小学校などに行きますと、かならず子どもたち一人一人の下駄箱（今は下駄箱とは言わないかも？）にきちんと履物が入っています。一般の家ではいつも履いている履物を下駄箱に入れる機会は少ないと思います。子ども達が友達の家へ遊びに行った時に「上は一寸・・・」のことが証明される。

また履物を脱いだあとは履物を百八十度向きを変え、二艘の船が今まさに出航するようにそろえよとも教えられた。何か事が起こった時に玄関よりすぐに出ることができるように、又見た目にも綺麗であると思う。もっともこの頃では学校では災害の時は上靴で逃げるそうだし、家庭でもスリッパで逃げるようだが・・・。

あっ！思い出した。中学生の頃履物のかかとをつぶして履くのは不良の始まりとの指導を受けた。この指摘が当たっているかどうかは自分自身ではわからない。私は未だにスニーカーのかかとをつぶして履くことがある。何年経っても不良の始まりと縁が切れない。

ぐり

「鈴鹿里山学院」施設紹介

今回の後援会たより第7号では、新設されました鈴鹿里山学院の様々な設備等の一部紹介をさせていただきます。

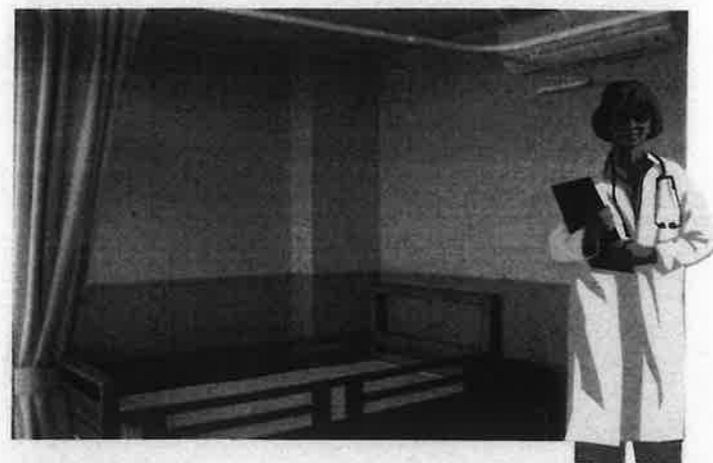


地域交流スペース

地域の皆様の交流を目的として多目的な活動にご利用いただけます。吹き抜けで、窓からたくさんの光が降り注ぐ開放的なスペースになっております。有事の際には学院が地域の災害避難拠点として登録されており、大きな交流スペースもパーティションで区切り、個室にすることもできるよう設計しております。

医務室・静養室

病気や怪我をした子どもに対応し、療養中及び病後の静養が必要な子どもにゆっくりと静養してもらう為の部屋を設置してあります。



ユニット

鈴鹿里山学院では春夏秋冬の季節の花の名前からとったヤマブキ、キキョウ、モクレン、コスモスという名の四つの生活ユニットがあります。各ユニットにはキッチン、バスルーム、トイレ、洗濯室に子どもの居室があり、各ユニットでそれぞれの日常生活が送れるよう設備を設置しております。生活体系を少人数のユニット制を採用することにより、落ち着いた空間で生活でき、子ども達に対してよりきめ細やかで家庭的な支援を行うことができます。



親子訓練室

親子訓練室では親子で生活し、日常生活に慣れていただくため畳敷きの和室にバスルーム、ダイニングキッチンを設置しています。必要に応じ、健やかな親子関係を育む為、親子で寝食を共にできるような部屋になっています。



鈴鹿里山学院開設にあたって ～児童の最善の利益を目指して～

本年4月、鈴鹿市に初めての児童養護施設「鈴鹿里山学院」を開設することができ、無事に竣工式典も終えることができました。これも日頃から後援会の方々の多大なご支援、ご協力の賜物と深く感謝しております。

今、子どもたちが育っていく環境は決して好ましい状況にはないと思います。家庭や地域の養育機能は低下し、複雑な社会の中で人間関係が希薄となり子育てに戸惑いながら疲弊する家族や生活困窮者など様々な問題が生じています。

平成12年に児童虐待防止法が施行されましたが、虐待を受けた子どもの数は毎年増え続け、危機介入や市町を主体とした発生予防対策の取り組みが進められるなど、制度の枠組みは整えられつつあります。

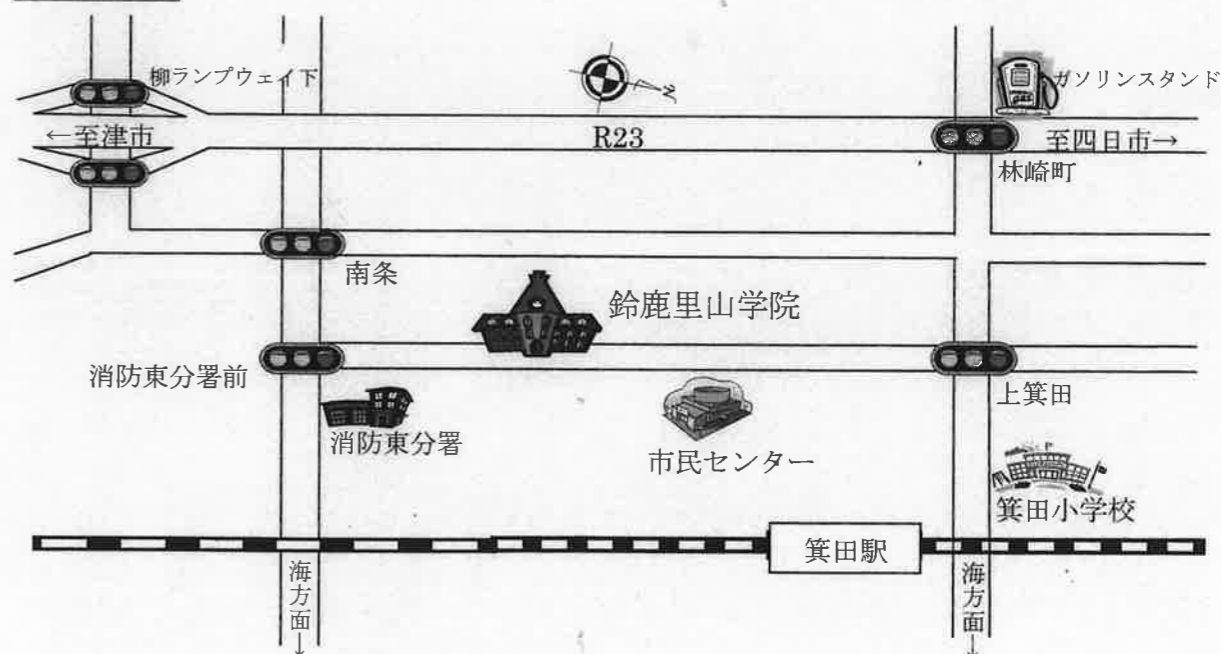
そういう中であって、児童養護施設は新たな局面を迎えています。平成22年末から23年初めに起きたタイガーマスク現象はまだ記憶に新しいところですが、国民の児童養護施設への関心が高まり、施設の最低基準（居室の面積や職員配置など）の見直しなどが進められています。

今後、児童養護施設に求められている方向は、①被虐待児や障害のある子どもの増加に対応したケアの質を高める。②家庭的な養護を推進するため、養護を必要とする子どもを可能な限り家庭的な環境で育てることができるよう、施設単位をこれまでの大規模から小規模なものとして、地域分散化を進めケア単位を小規模化する。③欧米に比べて低い里親委託を推進するため、里親支援や地域の要保護児童、家庭の相談支援についても施設が地域の中核的機関としての役割を担うなどです。

この方向にそって、開設された鈴鹿里山学院は定員が30人、ヤマブキ、キキョウ、コスモス、モクレンという四つの小ユニットからなり、食堂、各部屋は個室を基本として、できる限り家庭的な形の生活を目指して取り組んでいます。それから、地域との関わりの中で気持ちよく生活していくことは子どもたちにとって大切な事ですが、この地域や学校にとって鈴鹿里山学院という施設は初めての経験であり、これから関係を築き上げていかなければなりません。時間はかかると思いますが、職員共々協力しながら努力していきたいと考えておりますので、引き続きご支援、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

鈴鹿里山学院 院長 榎本 英典

学院案内図



編集後記

今回の会報では主に「鈴鹿里山学院」の紹介記事を掲載させて頂きました。学院の設立、紹介させて頂いたのも、後援会の皆様のご尽力の賜物と里山学院職員一同、心より感謝しております。子ども達も4月から鈴鹿市にて新たに生活を送らせて頂いておりますので、是非一度お立ち寄り下さい。今後もこのような形で学院の様子、子ども達の様子をお伝え致します。今後とも変わらぬご支援よろしくお願い致します。

里山学院 伊野 秀章